

三、秩父事件とフランス革命

一 困民党とサン・キュロット

僕のまわりの友達は、ほとんどそうだったんですけども、教授からテーマを与えられて自分の研究がなされるばかりが多いんです。だけれども、僕は何としてもそれだけはしたくない、ということとで、自分でできるだけ資料を探し、自分でテーマを選んで、自分の力で研究していきたい。そう思っただけは続けてたんです。

僕はそのころ、フランスの国家権力と共同体の関係について研究していたんですが、一九六九年に例の紛争が起こります。全国の大学で起こりますが、その時は非常に悩みました、正直いって。それは先程いったジレンマの、つまり現在の、現在というのは当時ですね、教師達の求める勉強と僕自身が考えてる勉強との矛盾、この矛盾というのが僕の中で大きく揺らぎました。

そして、ひとつは、もしも僕の考えてることを先生達にぶっつけて、議論をして、相手を罵倒な

んぞしたりでもしたら、自分の将来はメチャクチャになるだろう。まして就職なんか先生達なんか誰も斡旋してくれないだろう。そうすると、僕はどうしようもないじゃないか。なんとなく今まで頑張ってきた、一生懸命外国語を勉強したり、史料を読む力を付けたり、いろいろなことを勉強してきたことは、それじゃいつたい何になるんだろうか。とまあ、いろんなことを考えました。

しかし、反面で許せないことがいっぱいありました。

そのために、当時はルソーだとか、ルソーのフランス革命のときに生かされた抵抗の思想を一生懸命読んだり、アメリカの独立革命のときのトマス・ペインのコモンセンスというパンフレットを読んだり、それからイエリングという人の抵抗に関する論文を読んだり、いろんなことをして、なんとか今の生き方に決着を付けたい、そう思っていました。けどもやっぱり、いざですね、明日教授会へ雪崩れ込んでなにか一発やるぞということになると、前の晩どこか前々にそういう話が出たときから、すでもうだいたいぶ動揺しているわけです。果たして、そんなことできるだろうか。そんなことやつていいんだろうか。本当に眠れない日が続くわけですね。で、胃も痛くなりますし。しかしですね、やはり思い切つてやってみた。思い切つてやってみたらですね、なにか気分がスーッと軽くなったです。それは結局なるようにしかならないんだ。だから大学に残れなくてもいい。大学の教師になんかなれなくてもいい。自分のやつてきた研究を生かそうとすれば、自分で、自力で、友達のツテに頼つたり先輩を頼つたりして就職を見つけることだつてできるんだ。そういう気持ちになつてきたですね。



II-6 サン・キュロット
(ボリア画)

同時に、今まで怖つかなかつてしようがなかつた大学の先生というのが、ちつとも怖つかなかつなくなつたんですね。で、大学の教授の権威だけでなく、権威一般に対する恐怖からも少しづつ解放されてきたように思います。これは僕の人生にとつて、たいへんプラスだつたと思つてます。

で、そういう気持ちになつている時に、立教大学の井上幸治先生が、『秩父事件』を書いた井上幸治先生が、集中講義に来たんです。そして秩父事件の話は熱くほくされるんですね。僕もその本を読んで、そして、これではないだろうか。なにか求めてたのはこれではないだろうか。しかも井上幸治先生は、フランス革命と秩父事件というのは非常に似たところがある、というんですね。特に秩父の困民党とフランス革命のときの民衆であるサン・キュロットとは、双子のようなものだ、と

そのようなことをいつておられたんですね。

で、それはどういふのかといいますと、サン・キュロットというのは、キュロットというのはナポレオンがはいているような、ピツタリした半ズボンのことです。それをはかない、だからといってなんにもはいてないわけじゃないんですよ(笑)。長ズボン、パンタロンをはいてるんですけどね。あのフランス革命のときに、市民が、ブルジョアが権力を取つたときに、すぐ貴族化していくんで

す。服装まで貴族の真似をしていくんです。で、俺たちはそういう真似はしないぞ、ということでも長ズボンをはき続けたんで、サン・キュロットと、短い半ズボンをはいていない奴という意味でそう呼ばれた一群があるわけです。その一群の革命、民衆の革命、サン・キュロットの革命といいますけども、それと秩父事件の困民党とは非常に性格が似ている、というんです。

それと同時にですね、フランス革命に対して幻想を持つちやいかなぞ、というんですね。フランス革命に対する幻想というのは、つまり、フランス革命の現実をなにも見ないで幻想だけを描いていると、ヨーロッパに対するコンプレックスからいつまでも解放されないばかりか、日本のこれからにとつて非常にマイナスになっていくだろう。これまでズーツと、ヨーロッパ崇拜として、その根底になっているひとつとしてフランス革命というのがあったんだと。

たしかによく見ると、フランス革命だつてちつとも進歩的でない。あたかも市民が解放されたかのように思うけども、そうじゃないんだ。民衆はなにも解放されなかつたんだ。結局、都市の民衆や貧農というのは起ち上がるけども、最終的にはなにも獲得できなかつたんだ。獲得したのは、一部のブルジョワジーと、それから進歩的といわれた貴族たちが、権力を握つたに過ぎない。そのところをはつきりと見とかなきゃだめなんだ。そういうふうには教えられたわけです。

僕はこのことに非常に感動しました。で、それと北海道には井上伝蔵というのがいて、秩父蜂起のあと逃げて流れて来て、大正七年に三十五年間の沈黙のち死んだんだ、と。そう井上幸治先生に教えられて、それじゃ北海道のことは任せて下さい、というんで案内して歩いた。ところが、案

内していくうちに、だんだん僕がひとごとでなくなってきたわけです。面白くつて。つまり謎解きをですね、實際足で歩いてやつてるときのワクワクした気持ちですね。そういう気持ちになつていって、まずひとつに、自分の妻や子供にもなにひとつ自分の過去や本名も語らずに、三十五年間もじつと黙っていたということに、相当程度圧倒されたわけです。その圧倒されたあとで、それじゃ、その人間を作り出した秩父事件というのはどんなもんだつたんだろうか。もつともつと知りたい。井上伝蔵についても、もつともつと追求したい。まあ、そう思つて秩父事件に入り込んでいったわけです。

二 民衆道徳と抵抗思想

で、井上幸治先生が、秩父困民党とフランス革命のサン・キュロットとは双子だ、といわれたのはどういう意味なんだろう、と思ひながら、自分でいろいろ調べてみたら、だいたい二つのことがいえるのではないだろうか、ということがわかつてきたわけです。つまり秩父事件がどういふ事件だったのか、困民党はどのようなものをわれわれに残したのか、ということに深く関係することだと思ふんです。

それは第一に、秩父事件の中で困民が革命権・叛乱権ということをはつきりいつている、それを確認した上でやつていふことです。

ちようどそれは、フランス革命のときにも、圧制に対する抵抗の権利ということで、これは人権宣言のときからありますけども、しかし、それはジャコバン時代のサン・キュロットの運動が起つてくるころには、はっきりと「叛乱権」という言葉で出てきます。これは自分たちが打ち立てた政府であつても、間違つたことをやったらいつでもぶつ倒す権利があるんだと、そういう権利なんですね。だからましてや既成の権力に対して、われわれはその権利を持っているんだ。フランス革命の場合には、それは自然の権利だ、天賦の権利だつていうわけでしょう。

秩父の場合にも、ちゃんとそういうことをいいます。我々がやるのは、決して世の中を乱すためではないと。もっぱら、これは天下泰平の基なんだ。人民を安楽ならしめて、悪政を変じて良政に改めるんだ。そういう部分が出てきます。

その時にですね、悪政を変じて良政に改めるんだ、そういつてる農民が、じゃお前らは天兵が、天皇の兵隊が、お前らを攻めて来たらどうするんだ、というわけです。しかも秩父の困民というのは、秩父だけで蜂起しようとしてるんじゃないんです。秩父で蜂起したら、秩父全部を解放したら、すぐ埼玉県の浦和へ出て県全体を解放すると。そしたら今度は、東京へ出て、板垣公の、板垣退助の兵隊と合併して天兵に立ち向うんだ、というわけです。そこまで構想しているわけです。

そして天兵に立ち向つたときに、そのときに、天兵がお前らに鉄砲を向けたらどうするんだ、というわけです。そういう疑問が出てくるわけです。

そこである名もない農民が答えるんです。

その農民は、いやわれわれは大丈夫。自信がある。なぜならば、天兵というのは要するにわれわれと同じ奴等じゃないか。結局、これは簡単にいえば、徴兵制でとられてるわけです。だからそういう人間たちなんだ。いつてみれば、向こうが、天兵が、自分らに鉄砲を向けるのだとすれば、自分の兄や父に鉄砲を向けるのと同じことだ。そんなことするのは、全く不孝不義なことだ。ですから、全然親孝行者でもないし、ひどい奴らだ。そんな親不孝者が、われわれにそのオヤジに鉄砲なんか向けるよりも、もしもお前らが反対の方向に鉄砲を向けるなら、お前らもまた、自由の兵士とされるんだ。そういうええば必ずや聞いてくれるはずだ。そういつて自分にいい聞かせてるわけです。

これはですね、天賦の人権だとか、何とかでいつているわけじゃないんです。自分たちの独特の、毎日の、今までおつてきた伝統的なその生活の中にあつた規律ですね、親孝行とかなんとかですね。その規律をですね、それで生きながら、その考えで生きながら、それを質的に一段高めたわけです。

お前ら、俺らに鉄砲向けるのは親不孝だぞ。同じ親不孝するなら、もつとでっかい親不孝すれや、というんですね。だから天朝さまに向けれや。そうすれば、お前らも自由の兵士になれるんだ。そういうふうに説得すれば、必ずや大丈夫だと信じていたわけです。

ですから、この抵抗権の思想というのはですね、なにもヨーロッパから入つて来たものを鵜呑みにしたんじゃないやなくて、自分達の中にあつた、代々ずっと伝えられてきた、そういう伝統的な民衆の

思考方法の中から編み出したものなんです。これは秩父事件の中にはつきり出ています。しかも、自分たちが行動しているのは、その辺を乱すためじゃない。もっぱら天下泰平の基なんだ。そういつてることです。

三 平等思想の深化

で、もう一つ。秩父事件の困民の思想の第二の特徴となる点というのは、普通こういう運動の一番基礎にあるのは、政治的平等を要求することです。法的な平等を要求することですけども、それに留まっていけないということです。

つまり、法的に平等になったって、政治的に一人一票づつ与えられたって、ちっとも世の中が平等にならん。なぜならば、階級社会であれば、なんとしたってそこに矛盾が出てくる。もちろんそこまで言ってません。ただ板垣退助は、秩父事件を一種恐るべき社会主義の暴動だなんていつてますけども、しかしそれは社会主義と関係なくって、つまり社会的な平等を求めた。

家禄財産をも平均する、というんです。みんなの経済生活を均等にするんだ。これは高利貸が一方的に儲けて、自分たちが一方的に借金に苦しむなんて、これはおかしいことだ。そのところを平均にするんだ。家禄財産をも平均する。これは別に国家所有にしてなんていつてるわけじゃないです。ですから。

そもそも秩父の蜂起というのは、最初の請願運動のときからずつと同じですけど、反高利貸運動なんです。反高利貸運動を通じて、ずつとそこにある権力というものを見つめていつて、天朝さまに敵対するから加勢しろとかです。先程いつた悪政を変じて良政に改めるとかです。そういう考え方が出てくるわけです。最初の出発点になった高利貸との闘いというのは、最後の最後まで、これは秩父事件の基本的な課題となるわけです。だから、家禄財産をも平均する。実際に蜂起しますと、まず高利貸を襲います。その時、借金の証文を全部焼いていく。そのことが主たる仕事になります。さらに金を貸せといつてます。しかし、これはかっぱらうのではない。われわれが権力を握ったならば、しかもそのとき面白いことをいつてます。運よく権力を握ったならば、いつてます。運よく権力を握ったならば返すから、借金の証文を書いてくれ、と。まあ、自分らで書いていくんですけどね。しかも「革命本部」という名を入れてです。

まあ、軍資金集めるためにそういう行動をとりますけども、そこには高利貸との闘いがあつたわけです。金持ちとそうでない者と、社会的な力によつてなんとか均等化する。今の言葉でいえば、独占資本家もわれわれも同じ率で税金を払う。これは、ガツパシ貰つてる奴と、僅かしか貰わない奴との間では当然違いますからね。そのところで、独占資本家からガツパシ取らなさいいけない。だけでも仲々してくれない。全然してくれないんだけどね。それをガツパシ取つて、われわれからは取らないというふうにするのが、社会的平等だと思つてすけども。そういう思想がすでにあつた、ということ。

これは、実現はされなかつたけれども、フランス革命のときにも形としてはやっぱりありました。ロベスピエールが提起するヴァントーズ法というのがあります。このヴァントーズ法というのは、フランス革命のときに、逃げたり亡命した貴族や教会の所有地をです、一旦全部新権力が没収します。没収して、一時国家財産にしています。だけど国有財産として続けていくということでは全然ありませんから、ロベスピエールはそれを全部均等に割ってです、ただで貧農に分け与えていくということ提案した法律なんです。

ところが、そのときの革命勢力というのは、三つに分かれています。エベール派というのは、そこそ一種社会主義的な要素を持ってますから、ロベスピエールにはその角度から反対する。ダントン派というのは、これはもつと右寄りですから、そんな勿体無いことをするなという。結局ダントン派なんかの考え方ですね、ジャコバン内部での右寄りの考え方が支配的で、結局、これは競売りになつてしまふ。競売りになれば、これは金の持っている奴の方が絶対に強い。当り前のことですけどね。しかし貧農はですね、五円玉を手に汗が出るくらい握って、いつ五円になるか待っている間に、五千円や一万円で話が決っていくわけです。

結局、フランス革命の結果、その土地も全部富農だとか一部のブルジョワジーの元に入ってしまったんです。決して実現はしなかつた。

ロベスピエールは、貧農の圧力があつて、また自分も彼らの人気をとろうとして、止む無くその政策を出すんだけど、内部争いのために勝てないで、その考え方は通用しないままに終つたんで

す。だから、フランス革命はカッコ良くすすんだのではなくって、実際にはそんな結果になつていくわけです。

それから新権力は、これはロベスピエールの前のことですけども、労働者鎮圧法というか、ル・シャブリエ法というのを出します。これは、すぐ自分達が権力を握つたら、もつと下の農民や貧民が、今後革命を徹底させるような運動をすることを禁止するために出した法律です。こんな法律を一方で出しているわけですよ。だから、フランス革命もそれほど徹底した革命ではなかつた。そういう意味で実現されない部分がいっぱいある、基本的なところで。で、内容的に見ていくと、秩父事件ももちろんにも実現されなかつたけれども、秩父の困民の持っていた思想・意識という点では、フランス革命のときの民衆と同じで、具体的には、叛乱する権利、それからもう一つは社会的平等の権利ですね、このことを自分たちの実際の生活の中からつかみ出して主張し続けた。そのために闘つたということですね。